

II書 評II

尾野比左夫著

『バラ戦争の研究』

井内太郎

（一）

わが国における一五世紀イングランド政治史研究が極めて手薄であると言われ続けて久しい。それについて語ってくれる史料の量や質の問題もさることながら、より重要な問題は、たとえば一二一四世紀の行政機構の成立・発展や議会の成長期と一六世紀の絶対主義的統治機構の確立期に挟まれて、その位置付けがなかなかにして難しいところにある。一五世紀は、制度的に見てそのような大きな変革が起こったわけではなかったし、また政治史的にも、国内外の戦争・内乱を除いて、そのターニング・ポイントと見做しうるような事件にも乏しい。むしろ目立つのは、不毛な百年戦争によりイングランドは大陸の拠点を次々と喪失し、その間に国家財政もかつて見られなかった程に疲弊し、政治的・経済的・社会的な混乱を招いたこと、また国内ではバラ戦争が勃発し、イングランドの貴族たちがヨーク派とランカスター派とにわかれて、陰謀と殺戮を繰り返

し、多くの貴族たちがその中で露と消えていったことである。このように一五世紀政治史は、その前後の改革・発展の歴史に比して、ある一時代の衰退過程としてのマイナーなイメージが常に付きまわっているのである。

しかし、このような研究上の様々な障害があるにも拘らず、一貫してこの一五世紀イングランド政治史の研究を推し進めておられるのが、本書の著者、尾野比左夫氏である。すでに著者は、一九七八年に「イギリス絶対主義の成立過程」と題された本を世に問われ、その中で、ヨーク朝の統治体制を分析されながら、その絶対主義的性格を明らかにしておられる。それから一四年を経て公刊されたのが、本書である。

本書のテーマとなっている「バラ戦争」は、一四五五年の、第一次セント・オールバンズの戦いに始まり、一四八七年のラムバート・シムネルの乱、ストウクの戦いで終止符を打った一連の内乱、戦争のことを指している。「バラ戦争」と呼ばれるのは、バラ戦争を終わらせ、テューダー朝を開祖したランカスター家に繋がるヘン

リー七世が、自派の記章として赤バラを用い、その後ヨーク家のエリザベス（エドワード四世の娘）と結婚した際に、両家の合同を強調するために、この赤バラにヨーク家の記章である白バラを加えた記章をしばしば用いたことに由来するというのが定説のようである。このバラ戦争は三二年の長きにわたったが、しかし実際に戦闘が行なわれた期間について見ると、一二―一三週間に過ぎなかった（八頁）。にもかかわらず、一五世紀イングランド政治史において、同戦争はそれ以上に重要な位置付けが行なわれてきた。というのも、同戦争の過程で世紀前半期の大貴族支配体制が崩壊し、王権が他の有力貴族を寄せ付けないまでに勢力を伸張させていき、その意味で同戦争が「封建制から絶対主義への移行期に生じた過渡的現象」（七頁）として位置付けられ、イギリス絶対主義の起源について研究する上で、格好の素材を提供してくれるからに他ならない。著者の「バラ戦争」分析の基本的視角もそこにあり、より具体的には「ランカスター朝を打破したヨーク朝は、絶対主義的統治の施行をかなり成功に導いたのにバラ戦争を収拾できず、もう一度、テューダー朝による政権交代の浮き目を蒙ったのはどうしてか」（一一頁）というところに置かれている。

さて、まず本書の構成について見ると、以下の通りである。

## 序章

### 第一章 王侯貴族の誕生

### 第二章 バラ戦争の要因

### 第三章 バラ戦争と地域紛争

### 第四章 第一次バラ戦争

### 第五章 第二次バラ戦争

### 第六章 第三次バラ戦争

### 第七章 バラ戦争の終結

### 結章

本書の母体をなしているのは、既発表論文二三編であり、序章・第一章・結章は新たに書き下ろされたものである。内容的にはバラ戦争の原因（序章、第一章、第二章）、展開過程（第三―七章）、その歴史的意義（結章）とバランスよく配置されている。また論文の発表年について見ると、最も早いものは、一九六〇年であり、最近のもの、一九九一年と、このテーマが著者のライフ・ワークの一つであることがよくわかる。次にバラ戦争を分析する際の方法論について見ると、基本的には、これまで著者が渉猟された二次文献の成果を積極的、ある場合には批判的に吸収しつつ、論を展開するという形式が採用されている。文献目録、註に掲げられている文献について見ると、バラ戦争に関する文献として評者が思い浮べる主要文献はほぼ出尽くしており、今後この問題に取り組もうとする我々後進へ、貴重な文献資料を提供してくれている。本書の基本的枠組みの紹介はこれくらいにして、以下ではテューダー朝史研究者としての評者の関心に引き付けつつ本書の内容を紹介し、本書が著者の掲げた課題の解明にどこまで成功しているのか、考えてみたい。

## 〈二〉

まず、バラ戦争勃発の原因について語ってくれる第一、二章から見ることにしよう。この部分を読んで明らかなことは、著者がバラ戦争の原因を、まずその遠因としては、エドワード三世による王侯

貴族の創設、直接の原因としてはヘンリー六世の政治・財政政策の失敗に求めておられるということである。

エドワード三世は、五人の息子に王国の所領を分割相続させ、五つの王侯貴族を創設した。中でも注目されるのは、第三家Ⅱ四男ジョン・オヴ・ゴントと第四家Ⅱ五男エドマンド・オヴ・ラングレイである。すなわち、前者がランカスター家、後者がヨーク家の本筋を形成していくことになるからである。さらにジョン・オヴ・ゴントとかれの三度目の妻の間に生まれた四人の息子のうち長男のジョン・ボウファート (Beaufort)・サマセット伯の男系子孫で形成されたのがボウファート家であり、またエドマンド・オヴ・ラングレイの長男ラルフ・ネヴィル・ウエストモアランド初代伯と、ジョン・オヴ・ゴントとキャサリンとの間の娘ジョアン・ボウファートとの結婚で強力となったネヴィル分家が形成され、両者は傍系として王侯貴族の中に組み込まれることになる。そして順序としては、最後に登場するのが、テューダー家である。同家はウエールズのケルト人豪族の家系であり、ヘンリー七世の祖父オウエン・テューダーとヘンリー五世未亡人キャサリンとの間に生まれたエドマンド・テューダーが、ボウファート家のサマセット初代公ジョン・ボウファートの娘マーガレットと結婚して以来、王侯貴族の仲間入りをするようになった。この五大王侯貴族家が、バラ戦争の主役を演じていくことになる。では、バラ戦争の直接の原因となった、ヘンリー六世の政治・財政面での失敗とはいかなることか。

ヘンリー六世は、直系親族が少なく、そのため傍系親族、とくにボウファート家を偏重したため、ボウファート家支配体制を生んでしまった。これが、バラ戦争の政治的要因である。ボウファート家の代表人物はヘンリー・ボウファート枢機卿(ウインチェスター司教)であ

り、後にかれの意志を継いでいくのがサフォーク公(ウイリアム・ド・ラ・ポール)であった。こうしたボウファート家偏重政策に対抗したのが、ヘンリー五世の弟グロスタール公であり、かれは自派の勢力を拡大するために、ヨーク公リチャード(エドワード四世の父)と提携した。こうしてヨーク家とランカスター・ボウファート家の対立という、第一次バラ戦争の政治的要因が形成されたのである。

次にヘンリー六世時代の、国家財政の窮乏状態が分析される。ここでは、主に J. H. Ramsay と A. Steel の研究に依拠しながら論が展開されている。前者は一八九二年、後者は一九五四年に出版されたもので、これまでに両研究にはいくつかの問題点があることも指摘されており、その扱いは慎重を要する。にもかかわらず、これらの研究がいまだに乗り越えられていないこと自体、一五世紀財政史研究の難しさを物語っているといえる。まず当時の国家財政が困窮した最大の理由は、軍事・防衛費の増大であった。平時においても、その經常支出に占める割合は、およそ四〇パーセントを占め、戦時には一層膨大な臨時支出を余儀なくされた。中でも最大の支出はカレー維持費であった。もちろんこうした費用は、經常収入や議会課税収入のみで賄いきれるものではなく、政府は先例のない多額の借款を余儀なくされた。個人として最大のスポンサーは、ヘンリー・ボウファート枢機卿であり、かれはこのような立場を利用しながら中央政界での発言力を強めていったのである。一四五〇年代に入ると、主要債権者は、カレー・ステープル組合へと移っていく。中でも著者は、ボウファート枢機卿の死によって、ランカスター朝の財政基盤が失われたことが、政権崩壊の要因のひとつであったとして重視される。

さて、いよいよ第三章から七章にかけてバラ戦争の分析が試みら

れる。まず第三章では同時期の地方の貴族・騎士・ジェントリの地域紛争として、イングランド南西部地域のコートニー家対ボンヴィル家、北部辺境地域におけるパーシー家対ネヴィル家の争い、およびウエールズ辺境のイングランド西部ヘリフアド地域の紛争が取り上げられる。なぜここで地域紛争を取り上げるのかというと、中央政界における貴族間闘争（派閥争い）が当時の地域紛争と密接な連関性をもっており、お互いに勢力を拡大するためにそれを利用して合っていたこと、第二にヨーク公リチャードがこれらの紛争に積極的に介入し、地方の貴族・騎士・ジェントリの支持を獲得したこと、つまりこうした地域的要因が、ヨーク朝成立の重要な要因となっていたからに他ならない。ただ、このような中央と地方の貴族・騎士・ジェントリの主従関係の成立・争いを促した社会的な背景として、バスタード・フューダリズム(Bastard Feudalism)と呼ばれる、

従来のように土地の授受ではなく、新たに年金や仕着せの給与を媒介とする特殊な主従関係の横行があったわけで、この概念の規定とその実態についてまず整理したうえで本章を展開した方が、読者にはその意義がより伝わり易かったのではないかと思われる。評者にとって勉強になったのは、本書ではあまりおきなおきな扱いはされていないが、ウエールズ辺境の紛争におけるウエールズ人の動向である。たとえば、一四四八・五〇年にヘリフアド市で騒乱が起きた（一〇〇頁）。これは同市の大商人の寡頭政治に反発するもので、その首謀者には同市の小売り商人たちとともに、ウエールズ人たちが加わっていた。その際からウエールズ人たちは、市政からの排除の撤廃を求めているのである。かれらウエールズ人たちは、イングランドの経済・文化とどのように接しようとしていたのだろうか。またこの時期にウエールズ・ジェントリたちは隙さえあれば、たびたび

イングランドに侵入し掠奪を繰り返した。かれらの実態はどうだったのか。またあれほどランカスター朝政府に反抗的であったかれらが、なぜエドワード四世やヘンリー七世を支持するようになるのか、かれらはイングランドをどのように見ていたのか、興味は尽きない。評者にとつては、本書の中では周辺に置かれている本章を、むしろ最も興味深くまた新鮮な気持ちで読むことができた。

次に本題のバラ戦争についてであるが、同戦争はその性格からして、第一次から三次の戦争にわけることができる。この戦争では、個人対個人、家系対家系、党派对党派の陰謀・殺戮・寝返りが繰り返されおり、第四章から七章にかけて、さながら戦国絵巻のように論が展開する。そのため、中途半端に紹介することは、かえって混乱を招く恐れがあるので、詳しくは本書をお読み頂くとして、ここではその原因・過程・結果について、そのポイントを簡略に述べるに留めたい。

まず第一次バラ戦争（一四五五〜一四六四年）について。一四五〇年にサフォーク公が失脚すると、国王ヘンリー六世と王妃マーガレットは、サフォーク系のボウファト家サマセット公エドマンドを偏重したために、ヨーク家ヨーク公リチャードとの間に党派争いが生じた。当初、ヨーク公は王冠を目指していたわけではなかったが、マーガレットによるヨーク公弾圧が強まると、公然と王位を要求するようになった。そのヨーク公も途中で戦死してしまうが、かといってランカスター派も王位を回復するまでの決定力をもっておらず、その間隙を縫って一四六一年にヨーク公の長男エドワードが即位するのである。ヨーク派の最大の勝因としては、かれらがステープル組合の財政援助を得て、強力なカレー駐屯兵を掌握したことにあつた。さて、こうしてエドワード四世はランカスター派を打倒し、ヨーク

朝政権を樹立したわけだが、その過程でヨーク派のネヴィル家があまりに強大な権力を持つようになったことに、一抹の不安を抱くようになった。そのため彼は、ネヴィル家の勢力の増大を抑制し、政權中枢からネヴィル色を一掃しようとした。両者の亀裂はまずエドワード四世の結婚問題から生じる。ネヴィル家の実力者ウオリック伯は、フランスとの同盟を成立させるためにも、フランス国王ルイ一世の妹ボンとの縁談を進めていたが、エドワードはかれに無断で内密に中流貴族ウドヴィル家のエリザベスと結婚してしまう。仮にもイングランド国王が中流貴族の娘と結婚するなど、政治的にもまた社会的に見てもこれはまず常識では考えられない無謀な行爲であった。しかし、かれの強引な政策はそれにとどまることはなかった。かれは、政權中枢部を、ウイドヴィル家と王妃の連れ子のグレイ家の人間で固めるとともに、両家と上流貴族の縁組を半ば強制的に行なつた。これら一連の措置は、ネヴィル家を押さえこむためのものであつたことは、言うまでもない。こうしてエドワード四世対ウオリック伯というヨーク派内部の対立を軸に、第二次バラ戦争(一四六九〜七一年)の勃発を見る。ウオリック伯は、まず王の次弟クラレンス公を擁立しようとしたが失敗した。そこで、仇敵ヘンリー六世王妃マーガレットと手を結び、ヘンリー六世の復位を目指して、エドワード四世打倒の声をあげたのである。エドワード四世はブルゴーニュへの亡命を余儀なくされ、ここにランカスター朝の統治が復活する。しかし、この体制も所詮はランカスター・ヨークの寄り合い所帯であり、その基盤はきわめて脆弱なものであつた。エドワード四世が体制を整えて、イングランドに上陸・進撃を始めるともろくも崩れ去ってしまう。この戦争の過程でウオリック伯とヘンリー六世の皇太子エドワードが戦死、また期を逃さずヘンリー六世も殺害

された。こうしてランカスター家本流の血統が絶え、ここに傍系のリッチモンド伯ヘンリー・テューダーが、ランカスター家の王位継承者として舞台上に登場してくるのである。第二次バラ戦争を收拾して以降、ヨーク朝政権は王弟クラレンス公の謀反・処刑という事件もおこつたが、全体としては比較的安定していた。しかし、一四八三年にエドワード四世が急死すると、またにわかに雲行きがおかしくなつてきた。エドワード五世の即位に伴つて、エドワード四世の弟グロスター公リチャードが摂政となり、事実上、国政を主導していくこととなる。かれは、政權中枢を自派でかためるとともに、王妃派・反グロスター派の肅正を行なつた。さらにかれは、一四八三年七月にリチャード三世として即位し、八月にはエドワード五世とその弟ヨーク公を殺害してしまう。このような暴政に対して国内に反リチャードの気運がいつきに高まり、リッチモンド伯ヘンリー・テューダーのもとに同派が結集・蜂起という事態を招いてしまつた。第三次バラ戦争の勃発である(一四八三〜八七年)。一四八五年に両者は、ボスワースで戦火を交え雌雄を決した。この戦いは、リチャードの戦死とヘンリーの勝利をもつて終わり、テューダー朝の成立をもたらすことになつた。その後一四八七年にラムバート・シムネルの乱が起きるが、ヘンリー七世はこの反乱を鎮圧したこと、アイルランドに残つていたヨーク派の最後の牙城を崩壊させ、ここに事実上、三〇年あまり続いたバラ戦争も幕を閉じることである。この第三次戦争の中でいくつか注目しておきたいことは、まずウエルズ・ジェントリの動向である。当初かれらは、いずれの刃に立つのか態度を明確にしていなかったが、ヘンリーがウエルズに上陸すると次第に同陣営へ加わつていった(二〇四頁)。これがヘンリー勝利の第一の要因であつたということである。第二に、ボス

ワースの戦いの際に、リチャード三世が召集命令を各地の貴族・有力ジェントリたちに発したにも拘らず、かれの側にたつて戦った有力貴族は九人にすぎず、ヘンリーの側にいたつては、わずかに二人で、それ以外の貴族やジェントリの多くが、ことの推移を見守つていた（一九六、一九八、二〇五頁）。すなわち、これまでのバラ戦争と比較してみても、貴族たちの態度はかなり消極的なものに変化しており、この時期までにバスタード・フューダリズム慣行と大貴族支配体制を特徴とする一時代が終わり告げつあつたということがわかる。この点は第六章の第三次バラ戦争の意義（二〇九頁）として、もう少し強調されてもよかつたように思う。

さて、以上のようなバラ戦争の経過を踏まえて、著者は結章において冒頭に掲げた課題、すなわち、バラ戦争がなぜ二度の政權交代（ランカスター朝→ヨーク朝→チューダー朝）を生ぜしめたのかという問題の検討に入る。政權交代を促した第一の要因は、二度の國家財政の危機とその対応の失敗である。ひとつは、一四五〇年代のヘンリー六世時代、もうひとつはリチャード三世時代に起こつた。前者においては、ランカスター政權がカレドニ駐屯兵・ステープル組合の支持を失うことになり、また後者においては、リチャード三世の献金策の強要が、貴族・ジェントリ・商人の反発を強め、反体制派の結集を促したのである。第二の要因として、バスタード・フューダリズム慣行の普及があげられる。同制度は従来のように土地の授受ではなく、新たに金銭を媒介とする主従関係を基礎とするものであつたため、容易に裏切り・寝返りを生み、それがバラ戦争の規模を拡大し複雑化させたというわけだ。では、ヘンリー七世がこのような問題を克服してバラ戦争を終結させ、「絶対主義的統治政策」（二一四頁）を推進したとすれば、それはいかなる方法によつてか。ま

ずかれは、私権剥脱法（一四八七、一五〇四年）、皇室庁設置法（一四八七）封建家臣団解散法（一五〇四）の発布・施行によつて、反乱鎮圧にバズタード・フューダリズム慣行の打破に努めた。また有力貴族に対する処遇として、かれらに膨大な所領を与え地方統治の任に当たさせたが、中央政界の要職には、中小貴族・騎士・ジェントリを配置し、かれらの政治的影響力を抑制した。また海外に反乱の土壤を醸成しないように、アイルランド統治、ヨーロッパ外交にも常に目を光らせていた。こうして、ヘンリー七世は絶対主義的統治体制への道を開いた、というのが著者の結論である。

### 〈三〉

バラ戦争に関する研究は、イギリスでは、すでにかなりの研究の蓄積があるが、わが国でもやつと邦語でそれを読むことができるようになった点、これが本書の最大の功績といえるだろう。加えてわが国におけるイギリス絶対主義の起源に関する研究がまた一歩前進したことも疑いない。しかし、本書といえども、読者の要望や疑問を一切まぬがれるわけにはいかない。以下に、そのいくつかを指摘してみたい。

まず本書で、バラ戦争の要因のひとつに数えられているバスタード・フューダリズムの扱い方の問題である。バスタード・フューダリズムが事項索引にも載っていないことは置くとしても、同制度がバラ戦争の要因であつたとして、その否定的な側面ばかりが強調されていることは、一面的に過ぎるのではないだろうか。というのも、同制度が一方で國家統治面にも浸透し、中央集権的官僚体制の基盤を提供し、騎士・ジェントリたちの中央政界への進出の機会を創出

したこと、また社会の安定にも役立つ側面もあるからである。このように同制度に積極的な意義を見いだそうとする R. L. Storey, J. R. Lander らの議論については、もちろん著者自身も十分に踏まえておられるはずである。それだけに、そうした議論を整理し、著者なりのバスタード・フューダリズムの全体像を示した上で、論を展開してもよかつたように思う。

第二に著者は、ヘンリー七世がそれまでどの国王もなしえなかつたバラ戦争の要因の打破を初めてなしとげ、絶対主義的統治体制へ道を開いたとしてヘンリー七世治世を重視されている。しかし、著者は前者において、周知のエルトンの行政革命論を批判する根拠として、ヨーク朝からテューダー朝にかけての絶対主義的性格の連続性を強調されており、両者の間に微妙なバランスのズレが認められるのである。はたして何がヨーク朝からテューダー朝へと継承されたのか、またテューダー朝固有の特質はあったのだろうか。この問題は著者が絶対主義的統治政策という場合、具体的にいかなるものを前提としておられるのかという問題とも関わる。本書で論じられるように大貴族支配体制を打破し貴族を従順化させ、自らの管掌下においたといういわばネガティブな面ばかりでなく、たとえばこの時期のチェムバー財務行政の展開といった絶対主義的統治機構の生成過程がバラ戦争という政治過程とどのように関わっていたのかというよりクリエイティブな視点が同時にあってもよかつたのではないか。なるほど本書は、その対象を政治過程に限定したものであるが、そうだとすると、バスタード・フューダリズムが、当時の統治構造をどのように規定していたのかといった疑問は依然として残る。

第三に本書は、カレー駐屯地の動向も含めて当時の国際関係やアイルランド・ウェールズなど国内他民族に対する目配りはきいてい

るが、その基本的視座はあくまでもイングランドないし中央政界にある。今後求められるのは、複合民族国家としてのイギリス、たとえば主民族イングリッシュ（アングロロサクソン）の動向をアイルランド、ウェールズ、スコットランド人達がどのように見ていたのかといった視点ではないだろうか。とくに評者の関心は、テューダー家の出自からもウェールズに向う。ウェールズ人達がヘンリー・テューダーを支持した時、明らかにイングランドの支配からの自由をもたらししてくれることを期待していた。しかしその後の歴史についてみると、一五三六年のウェールズ併合法の発布に向けて、むしろ国王の直接支配が強まっていくことはよく知られている。しかしこの時期のウェールズ統治の実態については、なおも不明な点が多く、また他方でこうしたイングランド化の波をかれらウェールズ人（もちろんイングランド人領主やウェールズ人領主・商人・農民では対応もちがったろうが）たちがどう受けとめたのか。いわゆる「帝国と民族の共生関係」の一端が明らかになれば、テューダー絶対主義研究に新たな視点が加わることになるだろう。

以上、評者の要望、疑問点を述べてみたが、そのうちのいくつかは、評者の誤読によるものであるかもしれない。仮にそのいくつかが正当なものであったとしても、何ら本書の価値を歪めるものではない。本書は、今後イギリス絶対主義の研究を志そうとするわれわれ後進が必ず一度は目を通さねばならない研究書のひとつなのである。著者の研究の益々のご発展をお祈りして、ひとまず書評の任を終えることとしたい。

（近代文藝社・一九九二年二月刊・A五判二二七六頁・五五〇〇円）  
（鳥取大学教育学部助教）